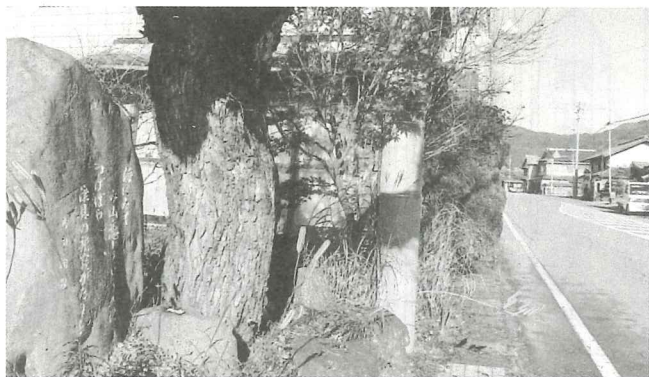


## 山崎家の歌碑と柳田國男

山崎珉平の四女克子(小説家佐々木味津三の妻)の「山崎珉平昔談」記によると、長女とし子が東京女子大学に在学中に病に侵され帰郷、津具で療養中に國男が見舞いに来た。

その時の思いを詠んだ歌が、津具字中町裏、県道設楽根羽線沿いに、珉平の孫である山崎祥一氏の宅地に歌碑としてある。

「海にゐてみ山戀しといふ人につげばや津具の旅寝がたりを」明治三十九年の正月、興津の浜にさびしい春を迎えて、國男はこう詠んだ。



國男はこの前年の秋、愛知県農會に講演を頼まれ、その後一

週間ほど三河路を歩くことになった。

最初安城で汽車に別れを告げ、明治用水を見て豊田、足助、伊勢神峠を越えて稲武、名倉を経て津具の山崎家に達した。

これは珉平の長女とし子の病を見舞うためだった。

子供の頃は東京の矢田部のお婆さんの処へ度々きて遊んでいたことを思い出した。もう女子大に入っているとし子は、國男が来たことをとても喜び、病人のようではなく、ランプの陰に座って話が弾んだ。

國男はほうぼうの海辺の宿屋や松原での貝拾い話などしながら寝込んでしまった。

とし子は、これが國男とのお別れだと言っていた。

國男はしばしば津具の山村を心に浮かべ、木地屋騒動、花祭り等夏目一平との交流もあり、山崎家とのことを考え思ひ出すことが多かった。

後年、珉平と初対面したときの印象を、眼は相応に鋭く議論も決して柔らかなことはなかった。

二十数年後、ご二人は既に年をとり、英気もほぼ衰え、考えてみると人生の寂しさを思い知らされた。

いつか年は忘れたが、治部坂を通って信州の方から津具の珉平翁と逢う機会ができ、とし子の墓を拝みに前触れもなく村に

入り、閑居の戸をたたいた、夏目一平君や後藤兵衛君がいろいろ紹介してくれたので話をするのに序幕は無用だった。ただ、以前はたくましい容貌だったのに、今は眼の光だけとなり、世の移り変わりを強く感じた、珉平の死後の回想でこのように語っていた。

「山崎珉平と妻くま」

明治八年、珉平十七才にて西洋医学の門に入り、同十三年東京大学医学部別科に進み、卒業以来研究修練を重ね、日清、日露の戦役に従軍、帰還後郷里津具で診療救護に、傍ら村政自治に、医術にと、相まって貢献した。

明治三十一年県下に赤痢病が大発生、当時まだ病原体は発見されていなかった。

珉平は自宅にてこの研究に没頭、ついに病原菌を発見、県当局、大学医学部に研究報告書を提出した。前後して志賀潔医師の発見もあつて、当時「志賀山崎菌」として学会に公表された。

妻、くまは珉平が東京で開業中往診に行った矢田部家で見初められ、明治十七年に結婚した。くまは旧沼津藩士の山下庫太利房とみち夫妻の一人娘であったが、一歳にして父親と死に別れたため、母みちの長姉の夫、矢田部卿雲(良吉の父)の養女となった。本来は良吉の従妹であるが妹ともなった。

良吉の後妻、順は、大審院判事柳田直平の長女で松岡家から國男を養子として四女考をめぐらせた。ここに血統はないが國男と山崎家の繋がりができた。

くまは、山下家の再興を強く望み三女田鶴に山下家を継がせ、長女梅子に庫太氏をもうけた。珉平は子女を皆東京の大学等に入れ、身元保証人を柳田國男に依頼した。そのため「柳田國男の伯父さん」と呼び気軽に柳田家に入り入っていた。

くまは、山下家の再興を強く望み三女田鶴に山下家を継がせ、長女梅子に庫太氏をもうけた。

珉平は子女を皆東京の大学等に入れ、身元保証人を柳田國男に依頼した。そのため「柳田國男の伯父さん」と呼び気軽に柳田家に入り入っていた。

植物学者  
米国のコーネル大学で植物学を学び、東京大学教授として日本の植物学の近代化に貢献し、日本最初の理学博士となる。

「矢田部長吉」

(一八五一〜一九〇八)

植物学者  
米国のコーネル大学で植物学を学び、東京大学教授として日本の植物学の近代化に貢献し、日本最初の理学博士となる。

父卿雲は幕末に蘭学者として活躍、江川太郎左衛門について、伊豆韮山の反射炉の建設に携わった。

「柳田國男」

(一八七五〜一九六二)

民俗学者  
東京大学卒業後、農商務省に勤務、各方面の役職に就き明治四十年代から役職の傍ら民俗学の研究に進み、「遠野物語」等多くの研究誌を創刊し、日本の民俗学を確立した。その普及の功により、一九五一年文化勲章を授与された。

(設楽町文化財保護審議会委員)

三浦 茂美